

## 平成29年度第3回総合教育会議 会議録

日 時 平成30年2月26日（月）午後1時30分から午後4時まで  
場 所 加悦保健センター 農事相談室  
出席者 山添町長、大迫参与  
岡田教育委員長、樋口委員、酒井委員、佐々木委員、塩見教育長  
安田総務課主幹  
坪倉教育次長、山本学校教育課長、森垣総括指導主事、柴田学校教育課主幹

（坪倉教育次長）

みなさん、たいへんご苦勞様でございます。それでは、平成29年度第3回の与謝野町総合教育会議を始めさせていただきたいと思ひます。その前に、町長からご挨拶をいただきます。

（山添町長）

みなさん、あらためましてこんにちは。本日は、平成29年度の第3回の総合教育会議ということで、たいへんお忙しい中ご出席をいただき、ありがとうございます。

そして、本日は大迫先生にも参加をいただきまして、与謝野町の教育改革論ということで、この間積み上げてきた議論を皆様方とともに共有させていただくという、非常に重要な会議になろうかと思っております。

本日が、皆様方とともに過ごす実り多き時間になりますことを心から祈念申し上げたいと思っておりますし、いつもながら積極的にご意見をいただきたいというふうに思っております。

それでは、本日はどうぞよろしくお祈ひします。

（坪倉教育次長）

ありがとうございます。それでは、議題につきましては、町長の進行によりお祈ひいたします。

（山添町長）

はい。それでは、早速ですけれども、本日の次第に沿いまして、議論を進めさせていただきたいと思っております。

議題としては、大きく3点とさせていただきます。第一に、「与謝野町の教育のあり方について」を議題とさせていただきたいと思ひます。それでは、事務局からよろしくお祈ひします。

(事務局)

議題の1番であります、与謝野町の教育のあり方についてということで、この間、町長のご挨拶にもありましたように大迫先生にたくさんのご指導をいただきまして、議論を進めてきたところでございます。

本日は29年度の締めくくりの会議ということでございまして、次年度にむけてということで、今日はいろいろと大迫先生からご提案をいただきたいということでお願いをしております。大迫先生にはたいへんお世話になりまして、ありがとうございます。先生からご提案をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

(大迫参与)

大迫です。よろしく申し上げます。今、スライドのほうも準備してありますが、2019年度与謝野町改革案というA4の資料をお手元に置いていただいておりますが、1枚目が今日、私が今から皆様方に一つの提言、提案としてお話しをさせていただきたい内容です。2枚目、3枚目が、事前に今回のこの改革案を考えるにあたって与謝野町からいただいている、基本的にはここは押さえてはいけないというところではあります。

最初のもので教育全般に対して、3枚目が英語教育というものに特化した内容で、町としてはこういうことを考えているし、用意をしているし、こういう方向性を持っていますということを事前に伺ったものになります。

この2枚目、3枚目に基づいて、案に肉付けをしていくというのか、この町でしか行われないというような独自性を持った教育プログラムというものを考えるということをするために、今からその背景となる考え方をプレゼンテーションという形でお示しをしたいと思います。

また、この前見ていただいたもの、2枚目、3枚目を確認しながら、具体的な提案のお話のところでこの資料に戻りますが、とりあえず、今度はスライドのほうを見ていただけますでしょうか。

「与謝野町教育改革案、どのようなことを学んだら本当に学んだことになるのか」というタイトルで用意しております。このサブタイトルにしている言葉は、私が教育プログラムをいろいろなところで、いろいろな方々と一緒に考えるにあたって、一番基になる問いかけとして、この問いかけからいろいろな考えを進めているというところになる表現です。安西さんという先生が、慶應の総長でいらっしゃって、2020年から始まる新学習指導要領の基本的な方向づけをされた先生になります。

その安西先生のお話をつい最近お伺いすることがあって、やはりこの方が本当に日本の教育改革を引っ張って下さっている方なんだという、ものすごい感銘を受けたんですが、安西先生がその時に私に使われた言葉です。どのようなことを学んだら本当に学んだことになるのかということを考えていく。それがこれからの日本の教育改革の出発点なんだということで、出典を本当は明かさなくてはいけないのかもしれないのですが、私の言葉で

はなく安西先生の言葉を使って、今までの学びが学びでなかったわけではないです。ただ、もう一度、我々は教育に携わる者としてこの問いかけというのを問うていくというところを、まず皆様方にお示しをしておきたいと思います。

次のところですが、町長がおっしゃったように今日が本年度最後の与謝野町総合教育会議でありますので、提案にあたって復習としてお示しをしています。

ご承知のように、10年に1回、国の教育課程、すなわち学習指導要領に基づいて我々の国は教育というものを形作っています。その学習指導要領というのは、10年に1回というペースで変わっていく。ちょっと振り返ると、いわゆる知識注入型、詰め込み教育ということです。特に高度経済成長があったようなところの教育になりますけれども、戦後の教育というのは一般的にそれが多かったと言われています。

それを引っ張っていた、ある10年間の学習指導要領がありました。これで本当に良いのだろうかという問いかけがあったわけです。子どもたちの状態から、そして受験戦争も過熱し、決して健全な状態ではないじゃないかという反省の中で、次の学習指導要領のキーワードが、みなさんもお存知の「ゆとり教育」です。

そこで、今までの詰め込み教育というものをなんとか変化させていく形で学習指導要領が起きました。申し上げたように10年使うわけですけれども、途中から、5年目くらいからだったと思いますが、だめなんじゃないかということで、いつもの学習指導要領の改定よりも早く改定されることが決まって、次に現在、我々が子どもたちに提供しているカリキュラム、すなわち「脱ゆとり」と呼ばれるカリキュラムで現在はやっております。

それがここ3年くらいの流れなのですが、今度はどうするかといった時に、戦後70年の教育の流れの中で最大の改革だと言われているのが、この「主体的で対話的で深い学び」という言葉で明確に表記されています。

今の詰め込み、脱ゆとりというのは、全て学習の量とか内容だったんですね。多すぎるとか少なすぎるとか、時間数をどうするかとか、どういう内容をどうするか、削るか、簡単にするだとか、内容とか量についてずっと議論をしてきました。

今回は内容についての議論より、より重要なことを考えなくてはいけない。何かというと、ここでは内容だと言っていないのです。基本的に、まず主体的という学びの態度について、何を学ぼうと、どういう内容をどのくらいの量学ぶかということ、それはどうあれ、まず大事なのは主体的に学ぶことなんだ、すなわち、今までの学びがこれの反対の言葉です。受動的であった。先生が教えてくださることを一生懸命聞いて、ノートに写して、覚えて、テストで採点していただくという、そういう明らかに受動的な形で子どもたちは教室での学びを続けてきた。この態度を変えようということです。

態度について明確に出した初めての学習指導要領です。ずっと言われてきました。日本の教育というのはとても良いけれども、子どもたちの姿勢が受動的だと。ここを変えていかないとというのが大きな教育改革のポイントになりました、

もう一つが対話です。これは協働型というふうに言ってもいいかもしれません。一緒に

学んでいく。一人で勉強して、一人で結果を出してという勉強ではなくて、クラスの中で共に学んでいく。それは先生との対話ということでもあるし、学級の中での、児童、生徒どうしでの対話ということもある。今まではどちらかというと個別的に、自分の成績を上げるということに一生懸命で、もちろん、この国には伝統としてグループ学習とか、班とか、そういうようなものはやってはきました。けれども、基本にはやっぱり個別の成績を上げるというところはどうしても主眼が行っていましたので、おそらく子どもたちの中で、意識的に何らかの形でダブルバインドという、二つの価値観の中で、何が大事かということで、グループ学習とか班での活動とかも、大事と思いつつも最後はやっぱり自分のほうに行ってしまう。

そのこのところを対話的という形で、常に協働型で助け合って、それぞれの持っている力を最大限に、対話的なスタイルでの学習の中で子どもたちの力を伸ばしてあげる。学びの方法ですね。姿勢、アティチュードと言うんですけれども、主体的であるという学びの姿勢と学びの方法について国が定めた基準ということで、今までになかった、あるいは今までずっと内容、量で議論をされてきた中で、触れられてこなかった最も教育的なテーマというものが、初めて学習指導要領という形で固まった。

そして、その後に深い学びという、試験で終わってしまうというわけではなく、人生に役に立つ、様々な場面で自分たちが生きていく、あるいは自分たちの地域が生きていくために学んだことが繋がっていくようなところまで、学びをきっちり、深く理解をしていくということで、英語で言うところではアンダースタンディングと単純に言われることなんです。知るだけではなくて、理解をしていくという、そこが深い学びということです。

この形で、これからの日本の子どもたちに教育を提供していかなくてはいけないというのが、2020年からの国としての大きな方向です。決して、問題として今回急に浮上したわけではなく、昔からここがこの国の子どもたちの良さで、こういうところをもっと伸ばしてあげなくちゃいけないと言われてきたことを、国として真剣に、国の制度として形にした初めてのことになるかと思います。

なぜそういうことになるかという、次の2枚目のところになるんですけど、IT革命、ビッグデータ、AI、シンギュラリティ、グローバリズム、サステイナブルソサエティと書いてあります。

シンギュラリティというのは、人工知能が人間の知能と並び、超えるという知性のことを指す専門用語になります。

サステイナブルソサエティというのは、持続可能な社会ということですね。このままでは地球は滅びるぞということで共有されている問題意識で、ここらへんがぶつかっている状況ということです。

このこのところは昨日も大阪でお話しをしたので、話したことと同じことを言いますが、第4次産業革命という言葉が私たちの中でもよく使われるのですが、竹中平蔵さんもその時にいて、積極的にそういう言葉を使っていて、僕もそこらへんをちゃんと伝えなくちゃ

いけないなと思って、今日は言いますけれども、今は第4次産業革命の真っ只中であるという時期です。

第1次産業革命というのは、18世紀の半ばにイギリスで起こった、いわゆる機械が動き始めた。機械がない時代は全部が手で作っていた。それが機械が出てきた。イギリスから始まった、いわゆる我々が世界史で勉強した産業革命です。その時は第1次なんかついてなかったです。産業革命と勉強しました。

だけど、機械ができたことによって世界は本当に変わった。社会全体が変わると同時に、もちろん個々の生き方、ライフスタイル、価値観が大きく変わった。だから革命なんです。

第2次産業革命は19世紀の末。人類が電気力を扱うようになった。そしてまた大きな革命が起こった。生産力が大きく変わりました。

第3次産業革命は20世紀末のデジタルテクノロジー。コンピューターによって世界が動き始めた。

それぞれ世界がドラスティックに変貌すると同時に、人間のライフスタイルや生き方、価値観も大きく変わってきた。

そして、第3次産業革命の直後くらいに、非常に時間の短い幅で起こっているのが第4次産業革命。キーワードはここに書いてあります、ビッグデータとAIというふうに考えています。これは真剣に考えるべき状況で、我々の日常の中ではあまり感じないかもしれませんが、世界全体の中ではAIとビッグデータというのであらゆる事柄が起こり始めている。

そういうような中で、子どもたちがこれから生きていくためには何を準備させてあげたらいいかというところが、教育を考えるにあたってのスタート点であるだろうというようなお話になります。

ところが、僕もここでもそういう話をした覚えがあるんですけども、この状況だから今までの教育はフィットしませんよと、試験が終わって、やっぱり同じようなことばかりしていたら、こんな時代は絶対に生きていけない。予測困難な時代と言われたりします。それに対しての対応が十分にできないでしょうということで、新しい改革を教育に、とりわけ、これはみなさんも聞かれたことがあると思いますが、AIに対しての教育が必ず出てくる。AIが、人間にできないいろんなことができるようになります。僕の家も、掃除は完全にAIがやっています。掃除機なんか要らない。もう人間がやる状況じゃなくなってます。

ちょっと前に温泉に行ったんですけど、温泉に行くと自動マッサージ機とかがありますよね。座ってたら、「そこそこ」とか言いますよね。僕が「あ、そこそこ」と言ったら、電動マッサージ器が「ここですね」と言ったんです。というのは嘘です。これは冗談。だけど、僕はやりながら、頭の中はそんなことばかり考えて、もし僕がここと言ったら、「はい。わかりました。」と言ってくれそうな気がした。

そういうくらいに、本当にいろんなことがカバーされていて、それだけAIが様々な場

面で様々なことを行い、例えば銀行では何割かの人が職がなくなってしまうという。それが出てくる教育というのが、A Iにできないこと、人間にしかできないことを育てるといのがこれからの教育なんじゃないかなと。

実は、I Tの世界大会というのがちょうど1年くらい前にあったんですけど、そこでも世界を代表するイギリスの学者さんが同じことを言っていました。A Iがこれから登場して、世界のいろいろなところでいろいろなことをやっていく。その中で、先生方が子どもたちに何を与えるべきかを考えてくださいというメッセージを出された先生がいたんですけど、まさにその通りだと思うんです。

それを考えた時に、ここからは今日の本題から離れてしまうかもしれませんが、もしかしたら役に立つかもしれない。実は、人間にしかできない、人間にとって大事なこと、今日の表題である「どのようなことを学んだら本当に学んだことになるのか」という問いかけは、A Iが登場したから急に始まったのではなくて、実はずっと前から存在はしていたんじゃないか。人間が人間として備えておかなくてはいけないことを育ててあげるのが、実は教育だったんじゃないか。それがたまたまA Iの登場によって、「人間にしかできないこと」という表現が浮上してきたけれども、もともと教育ってそうだったんじゃないか。人として生まれてきた時に、人としてちゃんと身につけておかなくてはいけないことを身につけてあげるというのが教育だったんじゃないか。

本当は私たちはそのことを知っていたはずなんだけど、この教育によってそれがぼやけてしまっていた何十年間があるんじゃないか。何もなくなってしまった1945年の状況から、なんとかしなくちゃいけない、みんなで力を合わせて国をつくっていくために、まず基本的なことをみんなができるようにしよう、みんなが同じような力をつけて、基本的な国の力をまずはつけてというところというのが、完成度の高いものに仕上げていくという国の強さが、子どもの教育まで、世界で稀に見る高度に発達した暗記型教育を作り上げてしまった。

そのことによって、我々がこういうふうな形での会議をもてるだけの基本的な環境があるという国に生きていくことができるのですが、同時に、本来、教育が子どもたちに授けてあげなくてはいけなかったことが少しぼやけてしまったのではないか。そこにただ戻っていくだけなんじゃないかみたいな気が、今、すごくしています。

だから、A Iの時代、21世紀の予測困難な時代の中で子どもたちがこれから生きていく、そのための準備をさせてあげなくてはいけないということで、何か特別に新しいことをということではなくて、実は原点回帰を我々は今、必要としているのではないかというのが、今、考えていることです。

そう考えると、先生方にとっては何か新しいことではなくて、なぜ自分たちが先生の仕事を選んだか、先生になってどんなことをしたかったかという、どの先生の心の中にも存在しているものと結び合わせながら、今回の新学習指導要領の担い手になれるんじゃないかというのをここ最近考えていて、それを僕の新しい主張として申し上げているつもりで

す。

AIとかビッグデータとか、いろいろな新しいものに圧迫を強く感じて、対応という形で動き出すのではなく、教育の原点である、我々はこんなことをしているという表現法が、実際に何かを生み出せるような形といいますか。

さらにもう一つ、予測困難な時代という、そこに子どもたちが向き合わなくてはいけない、だからこそそれに対して対応できる力を育んであげなくてはいけないという表現と、実は同時に考えなくてはいけないのは、誰が予測困難な時代にしてしまったかということ。それは我々大人たちがずっとやってきた社会制度であり、個人のいろんな問題であり、そういうものが我々の次を生きようとする子どもたちに苦しい状況を与えてしまっている。

そうであるならば、我々は責任をとらなくてはいけない。その意味でも、このままの状態で教育を続けているというのはあまりにも不誠実なんじゃないかと。こんな困難な状況を作ってしまったということを自らに問うて、そしてそこから、なんとかそれを乗り越えるための力を子どもたちにつけてあげなくてはいけないという、そういうある種の責任というようなものも感じないと、予測困難な時代に対する新しい教育を考えますという表現が、何かすごく無責任なんじゃないのかなという。こういうきな臭い言葉は、置いておいて下さい。

これもお見せしました、これまでの教育からこれからの教育への転換というのが、今お話しした形で、これを併せ持った中で実践されるのが、まさに人として必要な、小学校から中学校、18歳までの年齢の間にこれをうまく、バランスよくこの2つのものを混ぜ合わせてあげる教育というものをどうデザインしてあげるかという。

今までは、どうしてもこれまでの教育というものに傾斜しすぎていた。あるいはそれだけになっていたかもしれない。それを右側の教育、コンピテンシーというのは生きる力という言葉に置き換えて結構だと思います。

教科基盤型というのは、教科の学びができていればよい、もうちょっと単純な言い方をすると、各教科のテストの点数が良ければよいというのが、教科基盤型カリキュラム。小学校の場合は担任の先生が見てくださいますが、中学、高校は教科を持っている先生が勉強を教えてください。そうすると、教科基盤型ですから、どの先生方も自分の教科を愛しているので、そうすると、例えば国語の先生は「3時間じゃ足りません、4時間必要です」、理科の先生は「2時間じゃ無理です、3時間です」、教務主任は大変ですよ。悪い言い方をすると、みなさんが自分の教科のことしか考えてない。最終的には、教務主任なり校長先生が「これでやる」と言わないと、あるいは教育委員会が「これでやる」と言わないと収まらない。

それは教科基盤型カリキュラムの一つの現象だと思うんですけども、子どもたちにとっては限られた時間しかないわけですから、ここで教科基盤型というところから、各教科が何時間必要というような、教科エゴイズムと言ったら言い過ぎなんですけれども、そう

いうものを、教科を融合するような形で、場合によっては各教科を繋いだりすることによって、教科単体で動いていくという発想から少し離していく。

総合的な学習の時間というのはその端緒みたいな部分はあったんですけども、あれはどちらかと言うともう一つ教科が増えたみたいな感じなんです。本当は、総合的な学習の時間というのはその中に全ての教科が収まっているという状態が、今回の新学習指導要領の繋がりの中では良かったと思うんですけど、何か別の一つの、国語、算数、理科、社会、総合みたいなふうになってしまっているのですが、総合の学習の時間等に、融合型という形での学びでしか到達できない学びというのを考えるのが大きなヒントにはなるかというふうに考えます。

今までのことは序章として、町のほうから提示された教育推進案に基づき以下のように提案しようということで、先に申し上げておきますが、まだ与謝野町の歴史であるとか、伝統であるとか、文化であるとか、コミュニティの特性というのは、まだまだ本当に薄っぺらなところしかわかりません。皆様方が本当に深い部分で感じ取っていらっしゃる、多分、そこから教育というものを考えることがすごく大事だと思うんですけども、僕はそのところがやはりまだまだ、今日のお話を聞いたり、議論の中でも感じ取るところはあったんですけども、やはり僕はまだまだ予想の段階なので、何かずれているなというところがあるかもしれません。それは承知で書いていますので、活かせるところがあつたらというくらいの感じで見えていただければと思います。

提示文書の内容は、トータルには2枚目の教育全体に対するお考え、それから3枚目の英語教育に関して。網羅的という表現を使わせていただきましたが、「それらの内容はいずれも外すことができない重要性を持つが、そのことのみにとられるなら、今回のテーマである与謝野町の教育の特色を打ち出すことは難しいだろう。それらを大事にしつつ、思い切った特色の打ち出しを考える。実践においてもできるだけ特色との繋がりを意識する。」というのが私の発想の出発点でした。

網羅的というのは、とにかくこれもやらなくちゃいけない、あれもやらなくちゃいけないという内容です。教育はどうしても網羅的になりがちで、落としちゃいけないという意識が、教育をする側にはどうしても支配的な考え方としてあります。

そうすると、子どもたちにとってもいっぱいいっぱい、大学の例なんかがいいかもしれないですけど、研究者である大学の教官たちというのは、自分の研究成果でも全部を出そうとします。いわゆる網羅的に、あらゆることを学生に伝えようとする。私が代わりに言いたいのは、自分の研究成果を学生に伝えられたというある種の満足感というか、興奮に満ちて研究室に帰ってきます。「今日はやりきった、僕のやってきた研究を90分間で伝えきった」と。だけど、学生はほとんど何も学んでいない。網羅的というのはそういう危険性がある。こちらがしなくちゃいけないという、ある種の責任感、誠実さから出てくるその姿勢が、実は逆に子どもたちが学んでない状態を生み出してしまうという、とても逆説的な結果が生じてしまう。

だけど、心配ですよ。落としちゃいけないという、「確かな学び」、「安心、安全な学級」、新学習指導要領のこれを外したら絶対にだめ、心配、何をやってるんだと言われるかもしれない。だから、全部書きます。どの点も外してはいけません。だけど、これを全部やりきること自体がそもそも限界かもしれない。子どもたちにとっては **too much** で、先生方にとってもかなりの負担。

そういうことを、根本的に発想を変えないと新しいものはできないんじゃないかなと。ゼロにしてはいけません。押さえなくてはならないポイントは、私もいろいろな人に聞きました。ここは絶対に押さえなくてはならない、新しい何かをやるからそこに手が伸びなくなるというのはしてはいけませんことだ、それはわかります。ゼロにするのではないけど、逆に言えば、網羅的であることによって、結局、特色のない、非常に難しい、せめぎ合いのところなんですけれども、特色ということを求められるのであったら、どこかで網羅的であるという発想から決別しないとできないというのが、この2枚を何度も読ませていただいた中で、これだけでは先生は何もできないというのが、(1)の部分です。

(2)のプリントのほうで、学びの目標の一つとして、試験、受験ではなくコンピテンシー、さきほど申し上げた生きる力をとにかかく設定しましょう。

試験、受験を否定することはできません。さきほどの、これまでの教育を否定することはできません。試験とか受験、子どもたちの教育というのは送り出してあげる教育ですから、それで終わるというわけではないので、ちゃんと彼らが望む道にリードしてあげなければならぬので、それに対してバックアップしてあげるのは大事だけど、やはりどうしてもそればかりに最後はなってしまう。

それと同時に、コンピテンシー、生きる力というもの、もう一つ、生きる力と繋がるキーワード、これはIBの言葉なんですけど、ライフロングラーナー。生涯にわたって学び続ける人としての基礎を作る小中教育。ライフロングラーナー。生涯にわたって学び続ける人。

この2つを意識する小中教育というのが、試験、受験のみの内容から脱するヒントになるんじゃないのかと。先生という存在が人生の中に存在しているというのは、人生の前半だけです。今までの教育だと、先生という存在がないとどうやって勉強したらいいのかわからない。姿勢も、方法も用意できていないので、僕はその認識がすごく重要だと思います。先生という存在は、人生の四分の一くらいかな、いてくださるのは。その後は先生はいなくなります。先生がいなくなった残りの60年を、先生がいたかのように学び続けられるかどうかという力をつけてあげるのが、小中教育の大きな目標じゃないかなと。それくらい、ライフロングラーナーという言葉の意味がどのようなものか考えてください。

そのコンピテンシーというのとライフロングラーナーというものを一つの目標として設定する中で、ここはキーワードとして適切かどうか、今までこの与謝野町というものがやっていたらいいこと、それから伝統と歴史の背景というものを考えて、ものづくりというキーワード。

それは、最終的には皆様方が決められたほうが絶対に良いと思うんですけど、ものとは何かということは定義が必要で、例えば、先に言ってしまいますが、今日、僕はこういうものを持ってきています。Origami Cardとか、Origami Artという、英語の折り紙です。これは実は大阪インターナショナルスクールで、僕が学園長とかを務めて、そこで使っている、インターですから英語の教育で、小さい子どもたちのための折り紙の本ですけども、全部英語です。全部英語で、折り紙の作り方が書いてあります。こんな本はいっぱいあります。

例えば、英語教育でコミュニケーションをしている時、それは英語教育ですから、当然コミュニケーションはとても重要なポイントではあるんだけど、例えば、ものをつくるということを明確に、こういうものをテキストとして使っていくと、英語をマスターしながら、明確に目の前にものができていくというような英語教育というのは、子どもたちにとってただ言葉でやりとりしていくということよりも、すごく興味が出てくる。目の前にものがある、何かを作って、成果物としてそれが確認できるというのは、彼らにとってすごく大きなモチベーションになっていくんです。

今やっている英語教育って、何も残らないですよ。だから、目に残る形のものを取り込んでいく。そんなテキストって折り紙じゃなくても、クラフトと言いますが、図画工作ですね。例えば、英語圏の幼稚園の子どもたちのクラフトの本なんていっぱいある。大きな字で英語が書いてあって、どうやって最後はこんなものができますみたいな、そういうのが子どもたちの英語教育で、ものづくりの歴史を持ったこの町の英語教育としてはとても良いんじゃないかというような。

クラフトでも、もしかしたら子どもに近いような、そういうクラフトというのものも、英語の子ども用のものも探そうと思ったらできるかもしれないというのが、僕が今言っているものということです。

成果物として、それはこういう工作のものかもしれないし、例えば、自然の花を咲かせるとか、稲を育てるとか、そういうのもものづくりということで考えればいいのかもわからないし、ものに対して与謝野町の定義をされて、それに向かって一つのプログラムを作る。

英語ではこれじゃなくてもいいんですよ。折り紙でということであれば、みなさんは鶴の折り方を知っていると思うけど、本当にこうやって、英語でこういうふうにいけば、実際によく聞いていらっしゃるかもしれないけど、中学生、高校生が海外研修で現地に行つて、日本文化を紹介するというような機会がよくあります。そうすると、折り紙なんかでやるケースが結構多いんですよ。だけど、その子たちはこういうもので勉強したことがないので、何も言わないでこうしてこうしてみたいにやるんだけど、与謝野町の子たちはもしかしたらこういうので、ちゃんと折って、曲げて、合わせてみたいなのをちゃんと英語で言えて、国際交流の時に日本の文化を紹介できるというような、そういう現実的な交流向きの案かというふうに思うんですけども。

別に折り紙じゃなくてもいいです。どんなものでもいいです。探そうと思えば、こうい

うようなものはいくらでも探せるし、ネイティブの先生方に頼めば、こういう授業の三分の一はそのテーマで、三分の二は今までと同じように、使う予定のテキストのコミュニケーションスキルを育てる、スピーキング、ヒアリング、リスニングを育てるプログラム。だけど、三分の一は、サイモンセツズとかいうのをこの間見た時にやってらしたんだけど、どこでもやっています。ゲーム系ってやっぱりやるんですね。ゲーム系って、ずっとやっても正直そんなに効果がないです。親しむという意味では効果があるんだけど、英語のスキルをつけるという意味ではそんなに。それよりも具体的に、英語を使いながら何かを作ったほうが絶対に、僕は彼らにとってはどんどん進んでいくというふうに思います。

(3) はものとは何かという、図画工作だけではなく自然の中のものでもいいし、そこからへんはいろいろなアイデアというのが出てきたらいいのではないかな。例えば、成果物というものを明確に出していく。それがものをつくっていく、何らかの成果物を出していくということならば、英語の学習の時間だけじゃなく、そして総合の学習の時間だけじゃなく、小学校の中の通常の授業、中学校の中の通常の数学の授業、理科の授業、国語の授業、社会の授業の中にも、そのことをどこかで意識をしながら、与謝野町の教育の主体的、対話的で深い学びのキーワードをものづくりというふうに決めたなら、どこかにそれを頭の中に入れながらやることによって、今までと違うアプローチが一部でも出始めたらいいいというのがこの提案です。

④は、具体的な点はどうしたらいいかということで、まず考えられるのは総合の学習の時間です。例えば、一つのテーマで、ものづくりでもいいんですけど、ものづくりというので小学校一年生、総合の時間、ものづくり、小学校二年生、総合の時間、ものづくり。ただ、その後に副題的なもので、小学校一年生だったらどういうものが作れるか、二年生だったらどういうものが作れるか。

国際プログラム、これは実は、僕がこの4月からスタートさせるプログラムを持っています。国際プログラムの小学校のプログラムで、探求の単元という名称で、今の総合の学習の時間という感じでイメージしてもらえればいいですけど、テーマは小学校なりに地球を共有するというのを考えるんです。どういうことかということ、シェアリングプラネット、地球を共有するという事は、彼らが大人になってもずっと考えていかなければいけないことです。どうやってこの地球をシェアリングしたら平和的に持続させていけるかというのは、彼らが死ぬまで向き合っていかなければいけないテーマであり、7歳からそれをやっておこうと。7歳の時は7歳なりにシェアリングプラネット、8歳の時は8歳なりにということで、事前のトレーニングとしてテーマに向き合わせる時間です。

内容は簡単なことです。資源の共有というので、本当に重大な地球資源とかではなくて、教室の資源みたいなものから。小学校二年生は自然災害、三年生は水の価値、四年生は環境学習、五年生は平等の機会の実現みたいな、英語を日本語に訳してきたので硬くなっていますが、小学校一年生なりに、二年生なりにということで、シェアリングプラネットとい

うテーマを一貫して、学年ごとのテーマで学べることを設定していきます。

例えば、総合の学習で毎年学年ごとにばらばらになるんじゃなくて、与謝野町の小中の総合の学習の時間は一貫してこのテーマで、例えばシェアリングプラネット、例えばものづくり。各学年ごとにできることを考えて、ここで9年間の義務教育を受けた子は、ものづくりというテーマにおいて明らかに発展的に成長しているという一貫性があれば、今日はものづくりを仮に提案していますが、与謝野町らしい一つの言葉で内容を定めていけばいいのではないかと思います。

②は、その総合の学習の時間の中で、冒頭に申し上げた「主体的、対話的で深い学び」という、これまでの、特に先生方にとっては、体験的に未知数であるこの教育を、まず毎日の教育の中でやるのはほぼ不可能ですから、まずはこの部分でやりましょう。そのうちに少しずつ、こうやればいいのかというのが他の教科学習に浸透していけばいいというくらいの気持ちで、順番をつけたほうがいいのかというふうに思います。「主体的、対話的で深い学び」というのにこだわって、総合の学習のテーマ学習を9年間、一貫していく。

英語の学習においても、総合の学習と英語教育は同じテーマを共有する。そのことによって離れない、統一性をもった教育プログラムというもののデザインを考えていくというのが③です。英語教育においてもものづくりを主題とする。英語圏で使用される幼児、児童向けテキストに基づいたアクティビティを実践するというのが、順番が逆になりましたが、こういうものを使っていけば十分に楽しみながら、実際に自分に力が付いたことが確認できながら、英語の学習を三年生、四年生なりにやり始められるということです。

④は前の前にお話ししたことになります。総合の学習、それからそこにおける主体的、対話的で深い学びの実践、英語教育における主題の共有が、日常の中の各教科学習に何らかの影響を及ぼすような取り組みということで、そこでやってみたことで子どもたちの反応が今までにないものになったら、他の授業でも少しそういうものを入れてみるというのが④です。

最後、⑤は与謝野町における大人たちとの活動の繋がり。とりわけ伝統技術、職人の技との関係を模索するというので、町長がすごくリーダーシップを発揮されて、いろんな活動がこの町で起こっていることはある程度知っています。そういうものの中で、実際にいわゆる教育を受けている子どもたちとの繋がりというのが何らかの形で形成できないのかなど。特にものづくりと仮に考えていくなれば、伝統技術とか、職人さんの技とか、ここにしか存在しないものを教育プログラムの中に何らかの形で入れることができないのかというのが⑤になります。

スライドのほうの画面に、③に英語でものづくりというのが出ています。僕が学校という本を出したことのある、カバーデザインとかに関わってくれた出版社なんですけれども、僕がこういう本を出す予定だという連絡があったので、その原案みたいなものを整えてくれたんですが、この一週間でこの本自体の出版がやや遅くなるというのと、幼児向けにするという報告があったので、英語でものづくりというのは削除してください。逆に日本で

使えるものではなくて、海外にあるそういう幼児向けの本を使えばいいんじゃないかという発想に立っていますので、そこのところだけ修正をさせていただこうかと思います。

以上が、私がこの町の特色ということで、落としてはいけない様々な内容がある中で、なんとか無理のない範囲でそれを入れ込むことができないかという、そういう範囲での提案。そして、内容自体が、町の今までの流れからは少し難しいとか、あるいは距離があるようなものであるならば、発想として使っていただけるサンプルになるものがあれば参考にさせていただければというような形で、お話を聞いていただけたらというふうに思います。

プレゼンテーションとしてはここまでですので、あとは質疑応答の形で何かお話しすることができればと思います。よろしくお願いします。

(山添町長)

それでは、さきほど大迫先生から、どのようなことを学んだら本当に学んだことになるのかという問いから、大きく（１）から（４）まで問題点、そしてそれに対してどう向き合っていくかといった点をお話していただいたとっております。本日の議論の主題は、おそらくここになってくるというふうに思いますので、まず、先生からご意見をいただいた（１）から（４）まで、それぞれの部分に絞った議論をさせていただきたいというふうに思っております。

まず、（１）には、この間進めてきた与謝野町の学校教育というのは、さきほど先生からおっしゃっていただいたように、ある種の責任感に基づき網羅的に推進してきたという背景がありました。ただし、網羅的であったとすると、与謝野町の教育を打ち出すということは大変難しいのではないかと。それを前提として、どういうふうに私たちがこの特色という言葉に向き合っていくかというところについて、議論を進めていきたいというふうに思っております。

それでは、さきほど先生からいただきました問題提起、あるいは普段から思っておられることについてでも結構でございますので、委員の皆様方からご意見をいただきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

(樋口委員)

ありがとうございます。大変興味深くお話を聞かせていただきました。ものづくりというのは、私はもともと生まれ育ちが京都市内で、機音が毎日しているところで育ちまして、ありがたいことにそういったことを体験したまま、この与謝野町に来た時も同じような町だなと。ものづくりに関しても、職人さんの思いであったり、そういう心意気であったり、言い方はおかしいですけど、人間の欲望であったり、そういったところが垣間見えるのは、与謝野町も人と織物業界が繋がりが深いところですので、もちろんそういったところもあって、私が職業選択の中でこの道を選んだというところもあります。

ただ、ものづくりの土壌というか、機音も正直言って、私がこの地にお世話になった２

5年前からすると、機音を聞く軒数は極端に少なくなりました。25年ですから、成人している子どもたちはもしかしたら覚えているかもしれませんが。そういった中で、ものづくりというのが今の親御さんの中にもどこまで残っているかなというのがありますので、私の年代のものづくりと、今、これから小学校、中学校へ送り出そうという親御さんのものづくりの感覚というのが違うのかなというのが、これが正直な、今のお話を聞いている中で、確かに私たちも残したいし、残ってほしいと思います。ただ、今の若い親御さんたちが思っておられるものづくりということとの差はもちろん感じますし、こういう場で申し上げるべきではないのかもしれませんが、私も織物業界の中でよく聞くのは、次の後継者がいないのですね。というのは、こんな儲からんような、先の見えないような商売よりも、他所へ行ってきちんと仕事をしてとか、街中のほうがチャンスがあるから「帰って来んでいいよ」みたいなことを言っておられるような職人さんもある中で、私も含めて後継者を育てることについて考えるとなかなか難しいと思う中で、町長も先生も与謝野町の職人の技、ものづくり、そういうことをお話しされる中で、また僕らとは感覚が違う形でのものづくりというのがあるのかなというのを、大迫先生のお話を聞きながら考えていたところで、ぼやっとした話し方しかできませんが、僕らの固定観念のものづくりとは違った形の、新しいものづくりということ子どもたちに伝えていけるのかなということ、今のお話を聞きながら考えていました。とりとめのない話で申し訳ないです。

(大迫参与)

今のお話はすごくよくわかって、子どもたちの今の役割の大きな特徴は、コンピューターネイティブの世代だということ。これを外して考えることはもう無理だと思うんです。

今、そこから二つのことが挙がっていて、僕が例えば折り紙をやりましようと言うと、コンピューターネイティブの子たちにとっては何か変な世界かもしれないんです。特に僕のジェネレーションとしては、一つの発想としてそういう発想が出てしまう。

二つ言えるというのは、コンピューターネイティブの子たちだからこそ、さっきのAIから出たというのと繋がるんだけど、余計にその職人さんの技とかを知った時に衝撃が走るといふか、ものすごい感受性で捉えることができるんじゃないかという、コンピューターネイティブである彼らの特性の逆を突くみたいな、そういう発想が可能かどうかという、まさにコンピューターネイティブの彼らにとっては全く未知の世界かもしれないんです。

もう一つは、やっぱりものづくりというのが彼らの時代、彼らの感覚に合うものづくりというか、ものに合わせて何かを、成果物という言葉を出しましたが、成果物というものを、彼らのジェネレーションに合った成果物というのを考えなくてはいけないのかなという。このへんが、大人たちだけで話をしている教育議論の難しい問題かもしれないですけど、どうしても自分たちの世代のものを考えてしまうので、いまいち、若い町長さんと言われていた町長さんでもそれなりの年齢でおられますし、やっぱり、今の高校生や中学生と話すと、子どもたちはそんなことがさっさとできるものかとか、全然違うスキルと感覚

を持っているので、その子たちに我々が考えたことを押し付けていくというのがいいのかなという、できるだけ彼らの感覚、フィーリングに則した成果物というようなものを彼らを感じ取れるという仕組みのほうがいいのかなというのが、今のお話から感じたこと。出発は、コンピューターネイティブのジェネレーションであるという彼らの特性を考えていく必要がある。

(樋口委員)

今日は時間があつたらそういうこともお話しさせていただきたいと思って、あえてお話しするんですが、私は織物の関係の者で、例えば、織物でこういったものがあつて、与謝野町にちりめんがあつて、そういうところでテキストがあつて、そういうことを子どもたちに教えてものづくりを教えるという形が今までだったと思うんです。

それが、新しい子どもたちの感覚で、当たり前のようにコンピューターがあり、当たり前のようにタブレット、スマホがあり、インターネットで全員が繋がっている状況で、新しいものづくりの発想というのが、私が申し上げたように、私が考えるものづくりと、これからの子どもたち、これからの世代の人間のものづくりとが変わってくる中で、教育というのはどうしても、ちりめんがこうだったよとか、織物がこうだったよという、テキストに則したものを教えて、それを覚えましたかという、今までの従来のスタイルのほうが楽といえば楽のような気がして、今度、新しいものがどういったふうになっていくかという展開ということを伝えていく教育の方法が、正直に言って私の中ではまだ、形としてどういったふうに教育として形作られていくかというのがわかってないですね。

先生にとってもすごいスキルが必要でしょうし、私も不勉強なんですけど、そこらへんが教育と繋げていくところで、お話を伺ったものづくりの現状を、どういった形で授業で展開されていくのかなというのが興味深いといえば興味深いですし、それだけのスキルを先生たちに持っていただくということが大変だろうなという不安もあります。

(山添町長)

ありがとうございます。さきほど、そこを少し自問しきれていなかったというふうに思うんですけども、今日は大きく大迫先生から四点の論点を提案していただいておりますので、一つ一つ、論点をしっかりと共有していくということが重要なと思うので、まず、このプリントの(1)の部分。おそらく網羅的に、あるいは特色を打ち出すとか、こういうお話というのは、この間の教育委員会の内部の議論でも行ってきていただいているというふうに思いますので、我々の視点から議論を集約してみたいと思うので、よろしく願いします。

(岡田委員長)

網羅的という、やっぱりこういうふうに2ページに挙げているようなことを書くと、ち

よっと安心というのか、今まで私もこういうふうに出てきましたし、先生がおっしゃいましたように、こういうことは文面化することによって、安心して違う発想で考えられます。今までも委員会の中で一つの特色ということについては、いろいろな議論があったんですが、絞り込みがなかなかできなかったというのは事実だと思います。やっぱり、どこか外すと、そこに支障が起きたらどういうふうにしていったらいいかという部分もあって、思い切ったというところがなかなか難しいところだろうと思っています。

今、町長から（１）に則してご意見をということなんですが、先生の言葉の中で、道徳の教科というところをもちろんだがしろにはしてこなかったけれども、やっぱりそこらへんも重要だということ、ずっと与謝野町の特色ってなんだろうといろいろと考え、これも外せない、あれも外せないと考えた時に、なかなか一つに絞ることができず、反対に特色がなくても、中学校までの基礎さえしっかりしていたら、そこから子どもたちに自分の経験をさせていました。いろんなことを選んでいくのと違うかなということも考えたりしました。

なかなか特色というのは、樋口委員がおっしゃったように機屋が減少して、ものづくりイコール機ということはなくなっているような与謝野町で、現実的にはもっと農業の食べることは一生ついてまわるから、ここを育てて、それがうまくいったら地球環境にも良く影響するといったことが、子どもたちには大事なかなと思ってみたり、ちょっと漠然としているんですけど、食育を豊かに育ててほしい。いろんなことを子どもたちに要求しすぎてもいっぱいいっぱいになるので。

自分で決めることで、困難な時代になってもいろんなことを選択して、その中で喜びとか楽しみを見つけていける子どもを大人にしていくことが大事だと思う。心を豊かにしていくことかなと考えていました。

（大迫参与）

すごく、ある意味画期的な意見ですよ。網羅的でいいんじゃないかというのは。今日の議論は与謝野町としての特色ということで行っているわけだから、ものすごく良い意見だと思う。それこそ、ある意味で議論の根底をちゃんと確かめるためのすごく良い手段で、そうじゃないと特色は何かと、そればかり考えてしまうかもしれない状況に入る手前で、そのお考えは素晴らしいなと思って聞いていました。もしかしたらそれでいいのかもしれないという議論をした上での結論で、それはそれでいいと思います。

（森垣総括指導主事）

網羅的なことを指導している元は、私ども指導部だったんです。主体的に自分の人生を切り開いていく力をつけるということが本当の教育ですし、そのための学力をどう付けていくか。

中学3年生を担当していた時に、「先生、なんでこんなに数学を勉強するんだ」とか、「国語の漢字が何の役に立つんだ」という話を聞きましたが、私は社会科の教師ですので、「君は歴史でどういうことを勉強をしたの」と言っ、例えば江戸時代の農民は、契約書が読めないから騙されたり、計算ができないから年貢を搾取されたりした。国語の文字が読めるとか、計算ができるということは、世の中の真理が見通せると。君が高校へ行って、卒業して、例えば免許を取るという時に、物事を判断したり考えたりする、そういう時に力がつくんだよという話をホームルームで言ったことがあるんです。だから、今は数学の勉強の意味がわからなくても、後で振り返って「ああ、勉強したな」ということは先生にもあるぞという話はしたことがあるんです。

だから、子どもたちに学力を付けるということは、真実を見抜ける、騙されない、そして主体的に生きていく力をつけるということ。これは歴史が証明していますから。どれだけ庶民が時の権力者に騙され、裏切られ、さっき言ったように証明されていますから。そのための、騙されない、真実を見抜くための学力というのは大変大事ですし、そういう面では子どもたちが人生を切り開いていく力になるんだと、私は思っております。だから、「何になるんだろう」と中学校の先生がお思いになっても、そんな時期があると思います。でも、きっとそこで学んだことは活かされていくと思います。

網羅的というのは、私たち指導部の特徴でありまして、先日の会議でも、教育課程が今年度もありますけれども、それぞれの項目を落とすなよと、指導事項をちゃんとしきれよという話は、私が元ですから。

例えば、平成32年に新学習指導要領になりますけれども、移行の部分で、「この30年度に教えておかないと」ということになりますね。その部分についてもこのようにしておきたいんです。小学校、中学校の教務主任が各教科の移行の部分、この単元はここでやらないと、ここで学習しないととんでもないことになりますね。例えば、中学校でしたら、小学校は教科担任制ですから、教務主任が各教科の部分全部知っているわけがありませんので、でも勉強して、数学科教員は大丈夫かとか、国語科教員は大丈夫かとか言わないと、ちょうど中期選抜に入っていきますので、その時にここを習っていないととんでもないことになります。

小学校でも、この単元は3時間、4時間で終わるんですよという単元もあります。例えばそろばんとか。ところが、そろばんの一つの教科書が突然、学力テストの試験問題に出てしまって、習ってない子どもたちはその試験ができないことになりますね。だから、網羅的なことをやりきらないとだめだという指導を、過日、私が指導したばかりなんです。

特色の部分については、この四点ですけれども、今、私は教育振興計画を書いております。昨日も家で、教育振興計画の視点という形で書いておったんですけれども、私はここに書いてあるように、与謝野町に誇りを持てる子どもたちを育てる。そのために基礎学力を付けることが一つの教育の視点だという形で、今、振興計画の前文を書いていたところなんです。

だから、私は前段の「与謝野町に誇りを持てる子どもたち」というのは、過去、小学校が8校あって、中学校が3校ありますけれども、総合的な学習の時間の中でそれぞれ時間数が決まっておりますので、その中で工夫をしながら、あの学校についてはこの時間にこれをやっていこうとか。例えば一例を挙げますと、与謝野町の歴史と伝統について、ちりめん街道を重点的に採り上げている小学校や中学校があります。私が伺ったのは加悦中学校ですけれども、その時に与謝野学の加悦学とかいう名称で、教育委員会の歴史に関心のある方を招いて勉強をしたりすることがずっと続いていますし、それから、与謝蕪村の関係で俳句の取り組みというのは、時間数の多い、少ないに関わってきますけれども、各小学校、中学校で取り組んでいっておられるということですね。

それに+αして、それぞれの学校では鮭の遡上、自然と人間との関わりですね。鮭は福知山でも上って来ますけれども、自然に卵を産んで来るのは野田川だけですから、それも非常に価値があることなので、それをとり上げながら、やってない学校もありますね。それはその学校の独自性であって、それは与謝野町の誇りという意味で、僕は良いんじゃないかなと思います。

教育委員会のほうからは、特色のある部分でこれをやれというようなことや、何時間やいなさいとかいうことは言っておりません。でも、例えば俳句の学習というのは、これは与謝野町の誇りの一つですので、これについてはおしなべてどの学校も取り組みなさいという指導をしているんです。

だから、そういう時間が70時間ある中で、小学校8校と中学校が3校あって、全部を揃えてこの単元で何時間しなさいということはできていませんし、多い、少ないがありますので、それはいいかなと私は考えているんです。

ただ、網羅的にやれというのは私たちが口を酸っぱくして言うておりますので、現行の学習指導要領のすみずみまで、指導の部分を落とすことのないようにということを指導しています。だから、大迫先生が言われるような、そんなことをすると今回のテーマで与謝野町の教育を打ち出すことは難しいだろうと書いてあるので、その元は私たちがかなと思っております。

ただ、そういう中でもやっぱり、工夫と裁量の部分でなんとか各学校で特色を出してほしいなと思っております。網羅的に指導をしろと行って、すみずみまで教えることが私達の任務の宿命だと考えている訳なんです。

(山本学校教育課長)

先生からのお話の中で、コンピテンシー、生きる力。あとは、特色を思い切って打ち出す。ものづくりというところでお話のほうをいただいて、与謝野町の特色ある教育を活かして今後どうしていったらいいかということからのスタートかなというふうに思うんですけれども、生きる力については、さきほど先生から網羅的というところの中で、京都府においても知、徳、体のバランスのとれた力とっておりますよね。そこで、指導を漏

らさないようにということで学習指導要領に基づいた指導をしておるといふふうに思っておるんですが、先生の得意分野であるIBの中で、生きる力の教育プログラムと国のほうの教育プログラムの違いというところがあったら教えてほしいなど。

(大迫参与)

その前に、先生のご発言から網羅バーサス特色という二極対立項で僕が考えさせてしまったかもしれないので、そういうふうな読み取りがされる文章だし、プレゼンだったと思いますが、網羅的であるということもある意味、絶対的に外せないんだということも教育の現場、特に公立の学校の場合は、本当にいろんな背景の子たちがいる中で、基本的に僕は私学人なので、私立の場合は思い切って、ここは軽めでやっておいてという形で特色を打ち出しています。なぜかという、そこに来てくれている子どもたちというのが、そういうことが可能な生徒集団で、私学だからできることだといふふうに思います。

ただ、公立の場合はそれとは違う背景で教育活動を行っているので、網羅的であるということは至上命題である。英語で言うとトッププライオリティ。これを外してどうするんだというのはよくわかる。だから、僕が若干、私学的な感じで、そこらへんがやや緩やかにできるんじゃないかというところから、網羅的の隙間に特色という発想が入るのではないかと思ったんだけど、やっぱり僕が考えている以上に、そこに対しての責任というものが強く存在している中では、網羅対特色という二極対立的なものではなくて、ここだというものを外せない中で特色を出すか、あえてもう出さないかというふうな、そういう議論の組み立てのほうがいいのかなというふうに思いました。

そこは前提として、議論の必要なし、ここは絶対に外せないんですという中でやらないと、そういう前提が共有されてない議論では何も生まれないと思うので、そこはそうしたらいいんじゃないかなと思います。

それから、残る道は、網羅的というトッププライオリティを保守しながら特色というものを置けるのか、あるいはもう置かないでおこうかという、そこからの議論かなということのための、山本さんからの質問に答えると、とにかく全人教育ということなので、プログラム全体が生きる力に繋がっているという特色があるんです。

もちろん、各教科の学習というのがありますし、日本の学習指導要領のように各教科の学びの単元とか、そういうものがあります。ただ、さきほどの教科基盤型というように一見見えるけど、そうじゃないんです。構造としたら教科基盤型のように見えるけれども、最終的には、わかりやすく言えば「数学は何のために勉強しているの」ということに対しては、「幸福を実現するため」という、そういうような答えになってくるわけです。数学ができるようになるということではなくて、人生の幸せに繋がるため、自分の、他者の幸せに繋がるために数学を学ぶという。

例えば、それぞれに象徴的に示されるように、学びの目標自体が全て、教科ごとの学習の中でも最終的には、教科のテストもできるけれども、最終的には人間としての成長、人

間としてのゴールのために勉強しているという、そういう全体構造を持っているんですね。

それから、プログラムのどこの部分が、例えば奉仕活動とかいう必修科目があるんだけど、そこでそういうことを実現しているのではなくて、全体でやっているというのがIBの特徴です。日本の場合は、道徳とかそういうようなところで人間的なものを育みましょうという形で出てきたりするけれども、構造とはちょっと違う感じでしょうかね。

例えば生きる力、コンピテンシーというのは、プログラム全体に覆いかぶさっているものになります。そういう意味では、網羅的でそれを覆いかぶせればいいのかもしいかなということになると思います。

(塩見教育長)

先生、ありがとうございます。私はいつも思っておりまして、ここで学んだことをどう社会で活かしていくんだらうかと、このことは私たちの時代は反省すべきところがあって、やっぱりここで学んだことをどう活かしていくかということは大事なことだらうというふうに思っておりまして、先生がおっしゃったように、いわゆる公教育をあずかっている人間なので、いろんな子どもがおりますし、これからの義務教育からは、自分の個性を活かしていける教育。それまでの小、中学校時代は、いろんなものに対応できていけるための基礎を学ばせるという点をご理解いただけるだろうなど。だから網羅的になるんです。

でも、私が聞いておった中で、いわゆる探究学習がある。今は高校も探究学習。それが一つの、いわゆる総合的な学習の時間で何をもってやるかというのは、さっき総括指導主事が申しましたように、ある学校では環境教育をやっていますし、全部がやっているのは俳句なんです。

ただ、先生、一番気にしておるのが、さきほども未指導というのがありましたけど、結局、試験とか受験ではないと書いてありますけれども、どうも引っかかっておるのがここです。どんなテストがあるんだらうと、与謝野町だけ違うことをしていたら進路が開かれないという。そうしたら、ものすごく自分を責めるんです。

ですから、今でも、私が注目しておるのは大学の共通テスト。あれによって高等学校教育が変わると思います。高等学校教育が変わると、多分、高校入試の問題も変わってくる。変わってくるということは、小学校、中学校の教育も変わっていく。ですから、今、先生がおっしゃった考え方はよくわかっておりまして、そういうような入試制度、あまりこういうことを言ったらいけないのですが、将来、生きていく力になるような教育をしていくべきだと思っております。どうもその入り口のところが、私たちが教えていなかったことが試験に出たら、与謝野町の子どもは受からないということになると怖いなと思ったので。

先生がおっしゃることも、いわゆる総合的な学習の時間を使って、いわゆる主体的、対話的な学びというものを経験させておくということは他の教科に活かしていけるだろうなというのを、私はしっかりと勉強させてもらったなど、ある時には教科の中でも、そうい

う授業をできればいいかなということをおっただんですけども、どうも入り口のこと  
が、どうしても網羅的になっておるのは間違いないかなと思っております。

(大迫参与)

今のお話で、一つ参考になる情報というのが、センター試験が終わって、今度の共通テ  
ストには1000字の論述が出ます。これの議論をしていく中で、小論文とかはすでに大学  
でもやっているの、共通テストで1000字とかで論述をするというのは不要じゃないの  
かという議論が大学関係者から出てきてはいたんですけども、それについて、例えば10  
000字で小論文を書くという力と、1000字という中で自分の考えをきちんとまとめて書  
ける力は全然違うんだと。こちらは生きる力に繋がるんです。基本的な力として、自分  
の考えを他者にわかるように1000字でまとめるという力は生きる力。これが共通テストに  
1000字論文が入る根拠です。

小論文は今までやっていたからそちらで確かめるというのは、それは違う力を確かめる  
ことになる。これはかなり世界的にも推進している考え方なんです。ですから、これ自身  
もできるようにしてあげる。それはまさに、今、目標とし始めているコンピテンシー、生  
きる力を入試の中でもちゃんと繋げて、そこで勉強した力を発揮して、道が繋がること  
をちゃんと保証していこうという制度設計は、本当に始まっています。

逆に言えば、今までと同じようなことをやっていたら、与謝野町の子は共通テストの1  
000字を書けないかもしれないですよ。大学教育改革、高校教育改革、そのつなぎである  
大学入試改革という、完全に三本の柱でワンセットで動いていることは確かなので、それ  
がおっしゃったように下へ下へ、高校入試等に少しずつ下がってくるというのは、それも  
間違いない。この10年間で国に起こってくることなので、学校教育の中でもその部分  
は、新学習指導要領にしっかりと基づいてやっていたら、ちゃんとできるようになると思  
うんですけども、そこは結構、象徴的にわかりやすいところだと思います。小、中だっ  
たら400字の作文を書く力ではないです。1000字で書くことの力。そこはとても重要な  
認識だし、具体的な入試改革がそういう方向と結びついているというのは、絶対に共有し  
ておいたほうがいいです。

(塩見教育長)

先生、今の中1の子が大学受験の時に、まさにその問題を受けることになりますね。で  
すから、それは待ったなしの、これからの小学校、中学校教育に活かしていかなければな  
らないなという焦りはあるんです。ですから、そのへんのことをどう見据えながら、与謝  
野町の子どもたちに教育を提供していけばいいのかという課題を、私はいつも思っており  
まして、やはり、進路を開拓していくような力を、生涯学習ができるような力をつけて  
やらんなんというのが今の考えですね。

できるかぎり、来年度も小学校英語をなんとか充実させていきたいし、そういうことは

町長のほうにもご理解をいただいて、予算を付けていただいているということになっておるんですけども、そのへんは私もしっかりと見据えながら、これからやっていかんなんなというふうに思っております。

(酒井委員)

先生、ありがとうございました。網羅的と特色という言葉の理解のしかたが、みなさんでそれぞればらばらだったかなという気がして、例えば、歴史の鎌倉時代をやめて、ハンカチーフの作り方をやりましょうみたいな理解になってしまっているのかなど。

そういうものではなく、どちらかという内容的な網羅性というよりは、これは先生にお詫びをしないといけないかもしれないですけども、この後ろにある資料は与謝野町の教育という、学校教育、それから社会教育も含めた、こういった内容の教育を行いますという資料で、性質上、こういう網羅的な内容になってしまっているんですけども、その中でも実は、前回の教育委員会でこの資料の新年度版ができたんですけども、その時にも学校教育に関して言うと、特色とはそもそも何をするのかという中身がなければ、こういうリーフレットは書けないのではないかという話をさせてもらったんですけど、その中身の特色をどうするのかという話の部分だと思っているんです。

このリーフレット自体は性質上、網羅的なものになっていくのかもしれないですけども、それとはまた別のものとして、学校教育がどういうものなのかという部分に関しては、私は特色を出していく必要性は感じてますし、そういう意味で網羅的、特色を理解させていただいてもいいのであれば、私は大いに賛成だと思っております。

(佐々木委員)

ありがとうございます。以前に先生が行っておられる大学になぞらえて、与謝野町はこっちだよと出されたのがとても印象的で、確かに、いろんな可能性を追求できるんじゃないかと思えます。

もともと、私も大阪に住んでいましたので、人が多く規模が違うし、こういう会議もこんな人数じゃないかもしれない。その中で、一人一人が発言できる、そういうところからもすごく可能性がいっぱいあるなと思えます。

今、言われたように、このリーフレットを見ていても、全部特色だなと思えますし、子どもに学んでほしいなと思うのはここなんですけれども、折り紙や本なんかを使って、英語と図画工作を混ぜてみたいなのは、とても面白そうだし、そういうのも特色になるんじゃないかなと思いました。

(山添町長)

それでは、さきほど来、委員の皆様それぞれご発言をいただきながら、意見のほうは集約をできる許容範囲に入ってきたのではないかとこのように思っております。

この会議に出席をされている皆様方は、それぞれ教育ということの網羅性というものは非常に重要視していかなければならない。ただし、授業の内容の実践において特色をいかに打ち出していくのか、そして、実際の子どもたちの学びにいかに接続できるのかということとは非常に重要なことではないかというのは共通理解だと思っております。

したがって、(1)につきましてはそれを全員の共通の理解とさせていただきながら、以下もそのように進めていきたいと思っております。

そして、(2)なんですけれども、学びの目標の一つとして、試験、受験ではなくコンピテンシー、これは生きる力。生涯にわたって学び続ける人を学校教育においても育む。これはおそらく、皆様方にもご理解をいただけるところではないかというふうに思いますので、特段のご意見がなければ(3)の議論に入りたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

(3)の特色ある教育のキーワードとしてもものづくりを提案していただいているんですけれども、この分野につきましては、おそらくそれぞれ皆様方のご意見があろうかと思しますので、一旦、休憩を挟んでこの議論を続けていきたいと思しますので、よろしく願いします。

休憩（10分）

（山添町長）

さきほどの前半の議論に引き続き、(3)の特色ある教育のキーワードとしてもものづくりを提案してみようということで、先生に先ほどご説明をいただいたところのございました。

まず、この前提を確認しておきたいというふうに思うんですけれども、本町においては網羅的な学習を欠かすことなく、特色的な教育を進めているという認識に立っておりまして、この特色をどのように打ち出していくか、あるいは実際の教育現場で実践していくかという現状の中で、先生からはご提案をいただいておりますけれども、これらの点についてはこの間の教育委員会会議、あるいは総合教育会議でも、皆様方からいろいろなお話があったというふうに記憶をしておりますので、皆様方からのご意見なりご提言などをいただきながら、議論を進めていきたいと思っております。

（岡田委員長）

よろしいですか。この特色について、今、鮭のことも出ましたけれども、これは与謝小学校が中心となって、与謝野町としての特色でもあり、与謝小学校の特色のある学習の一つでもあるんです。各学校のそういうことを、全体ではなしに、各学校でそういうふうに特色を、与謝野町のものづくりという一つの大きなテーマで、あとは各学校で、地理的な条件もみんな違いますので、それはこちらからの提案もあるでしょうし、学校からもこういうことがしたいというふうにあるでしょうから、そういうふうに考えて進めていったほ

うがいいでしょうか。

(大迫参与)

僕はもちろんそういうイメージで、一つの町として大きなものがある。あとはそれぞれの学校が、そのテーマでどういうものをやるかは現場の議論、学校の議論だと思います。

(山添町長)

イメージとしては、一つの大きな方向性という意味でのものづくり。あとは各学校の地理的条件なり、この間の総合的な学習の時間で積み上げてきた議論がさまざまにあると思うので、そういう議論を紐解きながら、それぞれの各学年に応じた授業をしていくという提案だったと思うんです。

(大迫参与)

さきほども申し上げたかもしれないけれども、何か新しいことをこれからやるのではなくて、違う言い方をすれば、すでに行われているものを組み立て直すなり、あるいはそれをそのテーマで行っていたというふうに位置づけるとか、そうして整備することで、もしかしたら一つ、二つ、じゃあこうやってみようかというふうに学校ごとに出てくるかもしれないけれども、あくまでもそのテーマに則した組み立てが学校の中にあればよくて、組み立ての中にはすでにあるものが入っても構わないかもしれない。うまく組み立て直して、ものづくりというテーマになるかはわからないですけども、そのテーマとして読んだら全部読める、その読み方を学校の中で共有したり、子どもたちに伝えていけば、新しいことは何も要らないかもしれない。組み立て直すと、読み込みとか読み直しという、もしかしたらそういう作業で終わるかもしれない。

(森垣総括指導主事)

大迫先生からいただいた資料を事前にいただきまして、考えていたのですが、ここで先生がおっしゃっている「もの」とは何か。「もの」というのはどういう定義ですか。私はこれを見ながら、与謝野町はやっておるぞとっていて、こんなものをつくるのではなくて、例えば、さっき言ったように全ての小学校、中学校で俳句に取り組んでいます。こんなふうに教育委員会が方針を出して学校でやるということは、京都府下の中ではありません。

先生がおっしゃるように、俳句に取り組むことによって、その裏側で、俳句を作ることが目的ではなくて、これは与謝野町の伝統があるんです。私が考えておったのは、国語の語彙力を鍛える。そういうふうなことを裏側で先生方が共有してしまして、いろんなことを駆使しながら、5、7、5の短い中で使っていける語彙力を高めていとか、それから自然観察力ですね。与謝野町の風情に親しむ、そういう心情を育てるとか、そういう根拠の部分をもっと学校のほうで広げていったらいいなと思いつつながら、これはもう取り組んで

いるなと思います。

根拠になる部分での背景あたりということ先生方がもっと認識して、広げていって、こうだなということを持てば、もっと中身のあるものになってくるんじゃないかなと、この会議に臨む前に、さっき言ったように「もの」というのは何だろうか、決して、これは工作でやるようなものではなくて、例えば、俳句を通して子どもたちにどういう力を付けるのかという、そういう部分をもっと考えるといいのと違うかなと思いつつ、ぼや々と考えておったということです。

他にもこれに勝るものがあれば、また考えていったらいいんですけども、すでにそういうことをやっているなと思いつつ考えておったんです。

(山添町長)

各学校における俳句の学習というのは、どういう考え方のもとに行われていて、かつ、それを例えば6年間なら6年間、3年間なら3年間という期間の中で、どういう論理づけで組み立てられておられるんですか。

(森垣総括指導主事)

小学校では1年生から6年生まで、中学校でも1年生から3年生まで。指導の中身は発達段階によって違います。俳句の取り組みも長い歴史と伝統のある学校と、それから途中からやった学校もある。与謝小学校は長くその部分に取り組んでいます。

ただ、与謝野町の俳句の取り組みの中で、私が現職の時には俳句とは何ぞや、どういう観点だということ、有名な講師の先生を呼んで学んだりして、教職員も俳句作りに取り組む中で、真髓ですね。そういうことを教えてもらいながら、子どもに還元してきました。

中学校になってくると、小学校のそういう取り組みを土台に、国語科の中でそれを実践します。

(大迫参与)

小学校は総合の学習の時間にやるんですね。

(森垣総括指導主事)

そうです。中学校は国語科の中で。今年の12月に府の教育委員会のスクールミーティングが入ったんですけども、その時には短冊にそれを書いて見せるというふうなことを採り上げてやっておられます。

発達段階によって指導が違いますけれども、与謝野町はおしなべて小学校1年生から中学校3年生までそれに取り組んでいます。こんな地域は府下中でありませぬ。私は誇るべきだと思います。

(山添町長)

例えば、俳句を通じて学びとして得られるものというのは、例えば小学校1年生から中学3年生まで、設定のしかたは違うと思いますけれども、そういう後ろにある意図というものはきちんと共有されながら、授業のほうは組み立てられているということですね。

(森垣総括指導主事)

ちょっと言いにくいんですけども、そうだったらいいんですけども、さっき言いましたようにそういう部分が、子どもたちがどういう観点で心情を表すかとか、語彙力でどういうことをやるのかということをもっと共有したら、もっと質的に、俳句の取り組みが向上するのではないかなと思います。学校で、俳句の部分に関しては取り組みはお任せしておりますので。

(大迫参与)

今回の、ある種のテーマというものが共有されていく中で、少し進むかもしれないですよ。今までなんとなく、漠然と言ったら失礼かもしれないけれども、とにかく、今やられていることは本当に素晴らしいことで、ここにしかできないことで、それに対して新しい意味とか価値を付与して行って、整理をしていく、組み立て直していくという、その作業がまさに特色というものに自然に繋がっていくという流れが、すでに特色を作るための材料は存在しているという。

存在しているのだけど、存在しているものを整理した形で、意味を新しく付与し、再定義をするみたいな形でやっていくと、先生が言った本当にやってほしいところに近づけるかもしれないですね。

(山添町長)

前回、先生にお越しいただいて議論をしていた中で、確か、皆様方と共有したのは、いかに論理的な思考をもって教育的なプログラムを考えていけるかということだと思うんです。

だから、それを踏まえた上でテーマを決める、その具体的な展開の中で、さきほど先生がおっしゃったように、発展的に整理できるというのがすごく重要なんじゃないかなというふうに私も思います。

(岡田委員長)

私は最初に、これ以上の何かを与謝野町としても、与謝野町独自の教育のモデルを背景にしてお願いしてきたので、今、先生がおっしゃったことを、多分、前回の時に言語化して、理論化して、きちんとした言葉にして見える化をされたらいいんですというふうなことだったと思うので、今、それを中心にするかどうかはまだ議論の余地があるかとは思

ますが、そういうふうにならざることをきちんと理論化して、共有ができるように、これをするによって目標はここに到達するようにしましょうということを引き挙げていけば、大きな理由のある、特色ある与謝野町の教育になるのかなというのは、先生がおっしゃられた通りだと思います。

(大迫参与)

僕はよく、構想力とか構築力という言葉を使うんですけども、その勝負だと思うんです。同じことをやっても、なんとなくばらばらでやっているのか、同じものを構想力をもって構成することによって一つのプログラムとして成立させるか、そこは力の見せどころだと思うんです。

(樋口委員)

ものづくりというのは、どうしても、さきほどおっしゃったような工作物を作るということ、何か産業的にものごとを作るということ、この五文字を聞くと思うんです。

ただ、それをいろんな形で、例えば俳句とかに結びつけていくというセンスが、全教職員に持ってもらうというのは、不安材料を言って申し訳ないんですが、大変なことだろうなど。どういうふうにならざるを再構築して、ものづくりから、例えば鮭の遡上であるとか、自然を愛する心であるとか、さきほど森垣総括指導主事からあったように、僕も語彙力というのはすごく大切に、そこらへんにもっていくということの形を作っていくというのは、これは大変な作業になるかなと思っておるわけです。

余談ですが、いろんな方とお話すると、与謝野町ってあの与謝野晶子と関係するところで、うちの子供はみんな俳句をしたことがあると言ったらびっくりされたんです。それって、すごく特色があるんだろうなど。俳句を作るなんて渋い町だなど言われつつも、それも一つの特徴になっているのかなと思う。

それが、僕自身がものづくりということとどういうふうにならざるっていくのかなと、私自身が正直、理解できていないところがあって申し訳ないんですが、そういったところがもっとアピールできるというか、さっき言ったように、みんながびっくりされたようなことを世間に対してアピールできたらいいかなんていうことを思っております。私も、そのアピールする一人として頑張っていきたいと思っております。

(山添町長)

すみません。さきほど、(3)についてというふうにならざる上げましたけれども、(4)とも関連していますので、一体的に議論をしていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

(樋口委員)

国語の力というのはつけてほしいんですね。子どもたちに。もちろん、英語も大切だと思うんですけども、日本語の、国語の力というのはすごく大切で、例えば、算数の文章問題を解くにしてもそうだし、心の中を伝えることにしても、手紙一つにしても、国語の力というのはすごく大事なので、例えば、ものづくりと語彙力と、国語の力というのが関連するようなお話が伺えたらありがたいんですが。

(岡田委員長)

俳句一つにしても、短冊に書くのと大きな色紙に書くのとでは、ペンで書いたり筆で書いたりするにしても、それもまた広がって行って、ほとんどがメールだったら自分で字を書くことが少なくなっているから、そういう昔からの、墨で書くことも広がりの一つにはなってくるのかなという気がします。語彙力が深まるだけでなく。

(森垣総括指導主事)

新指の基本的な方向性の中に、これも大迫先生からいただいた資料の中にあるんですけども、このようにあるんですね。ちょっと紹介しますと、情報化の進展に伴い、子どもを取り巻く情報環境が変化する中で、視覚的な情報と言葉との結びつきが希薄になり、知覚した情報の意味を吟味したり、文章の構成や内容を的確に判断しながら読み解くことが少なくなっている。教科書の文章が読み解けないという調査結果があるなど、語彙力に関する課題が指摘されている。

語彙力は、全ての教科の基本的なことになりますので、情報化社会の中ではもう、この前の教育委員会でもありましたが、メールの中で文字離れが出て、泣いているマークで代弁してしまったり、自分の言葉で表現できない子どもたちが出ていますので、そういう面では、国語だけではなくて各教科の中でそういう語彙力をつけていかんなんというのが課題になっているんです。

どこかの市町の教育委員会では、漢字検定で語彙力をつけていこうとか、いろいろとありますけれども、意識してそういう部分の語彙力を高めるような取り組みを、例えば俳句でしたら、環境教育を通して自分の言葉でそれを書いていくとか、そういうことをしていないと、地道な作業が求められます。これは私だけではなくて、指導部のほうでは語彙力を高めるにはということの中で話をしています。

(酒井委員)

さきほどからお話が出ているものづくりという言葉の、「もの」の定義によって、ものづくりという言葉の捉え方はいろいろあると思うんですけども、何が私たちの特色かを考えていたんですけども、例えば、特色というと英語教育だったり情報教育だったり、ポイントで一つの分野に当てた特色ということに目が向いていたんですけども、今日、

提案していただいたものづくりというのは、そういった一つの分野ではなくて、いろんなものに多岐にわたって身動きできるものという意味で、このものづくりをご提案していただいたんだと思うんですけれども、そういった時にこうしたことを考えると、俳句を作ることであったり、何かを作ることであったり、これまで総合的な学習の時間で行われていた学習のほうに視点が向いてしまうんですけれども、作るということに関して言うと、そういう意味では各教科を繋ぎやすい。どの教科でも作るということとは何かしらの関係がある。作るという言葉の意味ももちろん、広い意味になるんですけれども。

私に誤解があれば訂正していただきたいんですけれども、私は「つくる」ということを、子どもが勉強する時にいつも意識をして勉強をするという意味でのテーマとして理解をしたんです。今までのカリキュラムに沿って同じことを教えるのであっても、「つくる」ということを意識して教えるか教えないかの違いで、子どもにとって何か違うものが生まれる。例えば、社会をつくることであったり、町をつくることであったりも「つくる」ことだと思いますし、本当に何にでもつくるということに繋がられるのかなという気がしています。

例えば、私も俳句を作ることであることをどんなふうにつくるということに繋がられるのかなということ、いろんなものを使っていくというのは、そういう部分もあるのかなと思って聞いておったんですけれども。

私事ですが、ちょっと前に漢字を勉強していた時に、甲骨文字で漢字の成り立ちを勉強していたんですが、その時に、これもそういえば、漢字がどうやって作られたかということも作るという意味になるかなと思って、甲骨文字が今の時代にどうなのかとは思いますが、何でも作るということに繋がられるのかなということで、私たちも、先生からご提案いただいたもので「じゃあこれにします」というのもどうかと思うので、もう少し、可能性として他のものも広げないといけないかとは思うんですけれども、このものづくりというテーマは、与謝野町を象徴するようなキーワードだったなというふうに思っています。

最終的には、さきほど先生がおっしゃった、人間にしかできないこと。考えると、このつくるということに関して言っても、作製の作るは多分、機械にもできるんですけど、創造するという創るは人間にしかできないことなので、そういったことがこれから必要なんだよということを教えるという意味でも、つくるということ意識して子どもたちが学ぶというのは、一つの意味があるのかなというふうに考えながら、学ばせていただきました。

さきほど言ったとおり、今日ここで、みんなで食いついて、じゃあそちにしようというものではないとは思うんですけれども、一つの新しい可能性なんだなというふうに感じました。

(大迫参与)

町長との出会いは、町長が文科省に飛び込んだというところからです。文部科学省の国際バカロレアに担当の部署がありますので、私はそこに入ってやっているわけですから

も、そこにとにかく飛び込んでいらした。与謝野町に何か新しい教育をということで、国際バカロレアについてはその後いろいろと、よくわからないけれども、ここに何かありそうだとということで来られて、与謝野町長が訪ねて来られているので、関西でもあるので、少し力を貸してあげられる時間はありますかというのが最初だったんです。

もちろん、そんなに教育に対して意欲的な方ということであれば、何かをということで、お会いをして、いろいろとお話を伺って、それで与謝野町の歴史、伝統とかを中心に伺ったんですけども、僕にとっては、僕自身がずっと都市で生まれ育っているので、特に伝統産業のすう勢というのか、さきほどのようなお話がすごく心に残っていて、ものづくりというのもそういうところから、そういう歴史と伝統というものが横たわっている町の教育ということで、ものづくりというのが出ました。

ただ、考え方としては変わらないんだけど、ものづくりよりは多分、中学生だったら、さきほど、ものづくりじゃなくてつくる人というのをキーワードにして、与謝野町の教育の特色の一言を、「つくる人」というので。俳句を作るし、自然環境も作るし、子どもたちが英語の時に工作も作るかもしれないけれども、とにかくつくる人ということ、ものづくりと言うと一般的に使われる言葉なので、イメージ的には何かそういう、ものを作るだけになっちゃいますよね。そうじゃなくて、今までやっていらっしやった、俳句もちろん圧倒的にすごいことなんですけれども、つくる人というキーワードを差し替えることにします。

背景としてあるのは、国際バカロレアの中にIBの学習者像というのがありまして、探究する人とか、思いやりのある人とかいう、そういうIBとして目標にする十個の像があって、それが常に意識されていて、IBの学校に行くとその十個の像がいろんなところに貼られています。Caring という、思いやりのある人なんですけれども、それから Open-minded、心を開く人。それから個人に対して開く、子どもたちに対して開くという、世界のあらゆる異文化との交流。そうした二つの意味があるんですけども、そういうのが十個あるんです。そういう、なんとかの人というのが僕の中にちょっとあるので、ここではつくる人という言葉で、与謝野町で教育を受けた子どもたちは常につくる人として、いつも先生方がその部分を強く掲げているというので特色としたらどうかというので差し替えて、つくるというのは何年生の学習かということも決まっていないので、この学年からはという感じにしておいたらいいと思うんですけども、ものづくりは撤回します。

(酒井委員)

つくる人に変えていただいたのは、私はすごくスマートだと思ったんですけども、まだキーワードでこれというふうには決が出ているわけではないので、ちょっと早いんですけども、方法論のところでお聞きしたいのは、こういったことを総合教育会議、あるいは教育委員会で決定をした時に、実際に授業をされるのは現場の先生方です。私がいつも心配というか、思うのは、そういったものを示した時に、現場の先生方がそれに対応できる

のかという、そういった点があるということで、そういったことはいつも思っているんですけども、こういった新たな、こういうものはこういう方針にしていきたいと思いますということを出した時に、現場の先生方からどうですかというご意見なりを伺うという方法はとられているんですか。

(大迫参与)

僕の知る範囲では、方向性としては管理的な立場のある人たちのほうから、最終的には下ろすものだと思う。ただ、その下ろすプロセスで現場の先生方の声を聞く、そういうところはあったほうがいいとは思いますが、こういう形で、責任のある立場の先生方がそれぞれ代表しているわけですから、そのプロセスは十分に通っているとするならば、大事なものは方針の後に、どこまで現場の先生方の自由裁量というか、自由に子どもたちに合わせた授業デザインをすることを認めていくかというところで、仮に来たとしても、それでこうやるんだというふうにやったら、それは何だということになると思うんですけども、大きな方針として共有されるもので、多分、ここで共有されたことはそれほど問題にはならないと思うので、あとは縛りというのをやわらかくしていくことがポイントになるんじゃないでしょうか。

さきほど申し上げたことと、今、委員が言われたことを、まさに日本全体が改革の真っ最中で、やはり現場の先生方の労働条件とか、負担というのは考えないと絶対にうまくいかないですから、そういう意味では今まであったものの再構築、組み立て直し、再定義、新しい意味、価値の付与みたいな、そういう作業をすることで先生方の、それだったらいけるという感覚を作っていくことが大事だと思うんです。

(山添町長)

それでは、さきほど先生から、ものづくりということからつくる人ということの一つのテーマに据えるということを再提案していただいております。こうした点も踏まえて、皆様からさらにご意見などをいただきながら議論を進めていきたいと思っております。

(佐々木委員)

与謝野町教育委員会としては、こういうテーマでいきたい、つくる人ということで、俳句を打ち上げていくなら、やっぱり先生も書いておられるように、各学校の先生方の意識が同じところがないと駄目なのかなと思います。なので、こういう意図をもってするというのが共通認識できていくというのが大事なのかなと思ったりします。やり方は、自由では難しいという先生もおられるかもしれませんが、言っておられるように自由でもいいだろうと思います。

(山添町長)

(3)の②に書いてあるように、キーワードによって意識が実現されるということにあわせて、それに向かっていくという認識の共有を進めていかないといけないと思う。それには、なぜ教育のキーワードをつくる人なりに求めるのかということも含めて、説明を進めていく必要があるということですね。

(樋口委員)

酒井委員がおっしゃったように、ものづくりという言葉だけだと、大迫参与が今日おっしゃいましたが、なかなかわかりにくかったんですが、今、つくる人と言われた中で、短時間ですがいろいろと考えると、何のために大人になって生きていくか、それはもちろん生活するためとか、生きていく、夢を実現するため、それをつくることですから、そういったことですごく共感が持てましたし、生きることに繋がっていくところだと思いますので、そういう人を育てたいなという気持ちになりました。すごく良いイメージがわいてきたなというのがあります。

昨年、10月、11月を使って各幼稚園から小学校、中学校と回らせていただいたんです。その中で、私が全部の校長先生にお願いしたのは、今、子どもたちがなんで勉強しているかということを教えてやってくださいと。ついつい、日頃の生活の中で、同じ流れの中で、日々、流れで行っている感覚というのがあるような気がするんです。それは先生もそうだし、子どもたちもそうだし、今、これが何に繋がるかということをついつい忘れがちで、算数のことが、国語の漢字一つを覚えることが将来どういったことに関わってくるか、生きていくうえで必要なものなんですね。そういったことを教えてあげるということも、これも「つくる」。君は何をつくりたいんだ、夢を実現するために、生きていくために何をつくりたいのかということがキーワードの一つになるとと思いますので。

校長先生にもお会いしたんですが、そういったことを私は思いますので、ついつい、学校が休みだと「やった」みたいに、大雪警報が出て、放送とかがあって、「今日は休みなんだ、行こう行こう」と言いながら、もちろん、休みは嬉しいなとは思いますが、学校に行って勉強することも喜びなので、それが喜びに繋がるということも日々の生活の中で忘れがちなことなので、そういったことともリンクしていったらいいなと思いながら、この言葉を噛みしめております。

(森垣総括指導主事)

私も、大迫先生の「つくる人」ということに共感をします。なぜかといいますと、「つくる」というのは主体的な言葉なんですね。自分が能動的になるということですね。だから、そういう意味では、「つくる」ということを通して能動的、主体的にというような、究極には先生が最初に、人生を自分の力で切り開く、そういう部分の根幹が学校教育の役割だと。学力を付けることはそのための手段であり、これから困難なことや、良いことばかりあり

ませんから、人生はね。逆境を乗り越えて切り開いていく力というあたりが、やっぱりそういう視点に繋がるのかなと思っております。

昨年、学力の向上の研修会に行ったんですけれども、教育長のほうから「何がわかった」と言われたんですけれども、一言で言ったら、それは子どもの意欲を育てる。これしかない。そのためには先生との信頼関係があるので、僕らも中学校や小学校の時に、先生が好きだから勉強しました。これは信頼関係が原点ですから、信頼関係をいかに構築するかというあたりに、現場の先生方は頑張ってもらいたい。そして、そういうふうな姿勢や意欲を育てることが、子どもたちが大きくなって、逆境に負けずに生きてくれることになるのかなと思ったりしております。

後半の、先生方のほうで意識の掴みを実現するというのは、学校の現場でこれをいかに浸透させるかということが私たちの役割になりますし、来年度でしたら、学校経営のトップであります校長先生方に、大迫先生がそのようなこと話していただき、意識改革をやらないと、なかなか現場には浸透しません。受けられた校長先生がどういうふう to それを考えて、現場に下ろすかによって違ってきますし、私たちもちろんそういう話をしますが、やっぱり直接、現場の校長先生方が意識を持って話すのと、我々指導部から話すのとは違いますね。教育委員会がこう指導されたというのでは、やっぱり力になりません。実感して取り組んでいけるような部分を、校長先生がいかに熱意を持って話すことが大切だなと思っております。

(塩見教育長)

私は、やはり何か成果物をやったなど、それが冊子であったり、俳句であったり、そこは私もそうだなと思った。何かものがないと。それはなぜかということ、学級通信というものがあるんです。それをずっと残しておる親がおりまして、そのことを何軒かの家に、あなたの子どもはこんなことを書いたよと。やっぱり、成果が見えるというのは大事なんだなと思っておりました。

それともう一つ、石川の城を調べたという探究学習を宮津高校の生徒が調べた。やっぱりそれも成果だなと思っておりましたので、できる限りそういったものを、毎年、そういうものを何か残せるような形がいいかなというふうに思って、今日は聞かせていただいております。

できる限りそういった、自分の力で考え、そして今まで学んだ知識を駆使して、そして考え、そして成果をあげていくという、こういうものはね、それが何をテーマにしていくかということは各学校によるかもわかりませんが、そういった形で、そしてその中でアクティブラーニングを学んでくれたら、これがアクティブラーニングなのかということが他の教科にも波及していったらいいかなと思って私は聞かせていただいておりますので、焦ってはできないけれども、総括指導主事も言いましたように現場は教員がやらないとどうにもなりませんので、その研修をぜひ、もし先生がよければ、年度当初の研修

会に、まず校長たちにその話をさせていただいて、理論的にも理解できるということにならないと、なかなか研修に広がりがないのかなと思っておりますので、できたらそのこともお願いしたいと思います。以上です。

(山添町長)

それでは、この本町としての特色ある教育のキーワードとして、「つくる人」ということはどうだろうかということについて、みなさんと議論を進めてまいりました。

そして、それに伴う具体的な展開といたしましても、総合の学習の時間を使いながら、各学年に応じて論理的に授業を組み立てていく。そうしたことが重要ではないかということだったというふうに思っております。

さきほど来、皆様方からのご意見をお伺いしている限り、今の私たちが議論をさせていただいた内容というものに対し、大きな反対意見というものはないかというように思っております。

そうした中において、私のほうからも所見を述べておきたいと思っております。今回、先生からものづくりについて提案をいただきました。このものづくりという言葉を考えていった時に、確かに、私たちの町というのは古くからものづくりによって発展をしてきた町であり、現在もなお、多くのものづくりに関する知恵、あるいは知識というものが地域内に蓄積をされているということから、地域に非常に合ったテーマ設定ではないかなというふうに思っておりました。

そうした前提の中で本日の会議に臨んでいたわけなんですけれども、あらためて皆様方のご意見などを聞きながら、確かに、現在の与謝野町の学校教育との兼ね合いでありましたり、より発展的なテーマの設定を考えた時に、つくる人という、大きな、イメージしやすい言葉に置き換えていただいたなというふうに思っていました。

その際に、先生のほうから、まさにこれは主体的に人生を生きるという姿勢にも繋がっていくんじゃないかというご発言の中で、私自身もあらためて感じたところでもありますけれども、この間、与謝野町の総合計画という計画を作っておりました。これは未来志向で、例えば二十年後、この地域がどうなっていてほしいか。それに対して、私たちがどういうアクションを起こさなければならないかということ議論してきたんですけれども、その中で私たちがよく言っていたのは、未来を予測する最善の方法というのは、自分たちでそれを発明していくことなんじゃないかということだったと思っております。そうしたことを含めて考えた時に、自ら人生を切り開いていく、その一つの学習のテーマとしてつくる人というテーマを設定することができるのであれば、それは一つの良い展開に結びついていくのではないかということ、私自身が今、考えました。

したがって、さきほど来、皆様方からご意見をいただく中で大きな反対がなかったと。そして、この間、皆様方からの議論をいただく中で、私も含めてですけれども、概ねの方向性を確認できそうだと判断いたしまして、本日のこの会議において与謝野町の教育

のキーワードとして「つくる人」、そしてそれらを具体的に展開していくということを皆様方と確認したいと思っております。

確かに、委員がおっしゃるように、結論に至るまでの時間というものがなかなか短いということもあろうかと思えますけれども、これが平成29年度の最後の総合教育会議ということもございますので、私としては皆様方とともに一年間を通じて議論を積み上げてきた認識をもとに、最終的な、具体的な決定事項として、できれば結び付けたいと思っておりますので、この点につきましては皆様方からのご協力をいただきたいと思います。

それでは、さきほど来、皆様方と議論をしておりました議題（1）番、与謝野町の教育のあり方について議論の終結をしたいと思っております。

続きまして、（2）番、教育大綱について事務局から説明のほうをお願いします。

（坪倉教育次長）

それでは、教育大綱についてご説明を申し上げたいと思っております。お手元に与謝野町教育大綱をお配りしておりますけれども、この教育大綱については平成27年度から29年度までの3ヵ年ということで作ったものでございます。

教育大綱につきましては、地方公共団体の長が定めるということを法律で規定をされております。その制定をするにあたっては、教育委員会の意見を十分に聞いてということになっております。

29年度末までということについては、町長の任期と合わせた格好になっております。年度末まであと一月ということでございますけれども、4月には町長選が予定をされております。それ以降につきましては、さきほど申し上げましたように町長が定めるということでございますので、選挙が終わりまして、次の任期に向かって作らせていただくということで、またこの総合教育会議の中で揉んでいただいて、次の教育大綱へという形になると思っておりますので、そのことを確認いただけたらということでございます。

（山添町長）

ただいま、事務局から教育大綱について説明がありましたけれども、この点について皆様方からご意見なりありましたら、お願いいたします。

よろしいでしょうか。それでは、（2）番の教育大綱についての議論を終決したいと思います。

それでは、（3）番としてその他ですけれども、事務局や委員の皆様方から発言などありましたら、よろしくお願いいたします。

（坪倉教育次長）

事務局からはございません。

(岡田委員長)

橋中は空調工事がもうすぐ終わって、快適な環境になりつつあるかなと。他の学校も、できましたら速やかに環境を整えていただけるとありがたいかなと思います。

(山添町長)

江陽中学校も今年度ですね。

(岡田委員長)

順次整備していただけるようにお聞きしておりますので、ありがたいなと思っております。

また、統廃合につきましても、各地域で取り組む中で、いろいろありますけれども、進んでいけるかなと思っておりますが、いろんなご意見があるので、まだ何回か地域で説明会をされるとのことでしたが、次はいつ。

(山本学校教育課長)

この間の教育委員会議でもお話しさせていただきましたが、与謝方面につきましては二回目を3月14日で予定させていただいております。

(山添町長)

今、岡田委員長からありました発言については、大迫先生とも共有をさせていただいたほうがいいと思いますので、少し事務局から説明を願いたい。というのは、この間、先生には特に与謝野町の教育の内容について皆様方と議論を続けてきたと思うんですけども、この間、与謝野町は小学校の統廃合の問題にどういうふうに向き合っていくかということも議論してきましたし、それと同時に教育環境の整備というのも積極的に進めていく必要があるだろうということで、一定の成果もあったように思いますので、それらの点、小学校の統廃合、そして教育環境の現状、そういったものを事務局からあらためて説明をお願いします。

(山本学校教育課長)

まずは空調の関係、教育環境ですけれども、町立の中学校が2つ、組合立が1校町内にありまして、そのうち加悦中学校が校舎全体が新築になりましたので、空調設備は整いました。他の二校につきましても、今年度予算の中で組合立の中学校と町立の中学校につきましても、普通教室、特別教室あわせて空調のほうの整備を進めております。

小学校につきましても、さきほど町長からありましたように、町内に8校ありまして、旧町単位ごとにあるんですけども、そのうち加悦地域については3小学校あるんですけども、それを平成32年度の統合を目指していくと。これについてはやはり、児童数が

減少しておりますので、よりよい集団づくりの中で学習環境も含めて整えていくというところで進めております。

あと、野田川地域というところが4校あるんですけども、そこについても順次進めていきたいなというふうに思っておりますが、現時点では何年度にというところまで至っておりません。統合を進める中で、環境整備についても、まずは中学校でしておりますけれども、今の既存の学校全部に空調もなかなかできないものですから、統合を進める中で整備のほうも考えていきたいなというところがございます。

現状、今の加悦地域の32年度に向けての統合を進めるにあたって、PTA とかのほうでは説明会を終わらせていただきまして、ある程度のご理解をいただいておりますのかなというところなんです。地域の自治会のほうに説明会をやらせていただく中で、やはり距離が増えるものですから、スクールバスの関係がどうなんだというご意見と、あとは跡地利用の関係で、三つのうち一つについても違う利用の方針を考えておるんですが、一つの学校については、今のところ全くプランがないものですから、地域のほうからもどうなんだというご意見もいただいております。そのご意見がある中で、その地域については二回目の説明に入っていくというふうになります。

(大迫参与)

いくつの小学校がいくつになるんですか。

(山本学校教育課長)

加悦は3校が1校です。野田川地域は、4校を1校にまとめる。

(大迫参与)

現在の8校が最終的には3校ということですね。

(山添町長)

学校の生徒数の規模というのはどれくらいでしょう。いわゆる適正規模というか。

(大迫参与)

適正規模という概念自体がないと思う。どの規模でもやり方はあると思うので、ただ単純に人数の問題であるとか、そういうようなことというのは、配慮ができればそれに越したことはないけれども、どんな環境でも良い教育ができると僕は思う。仮に男の子が7人で女の子が1人になったとしても、できないことはない。

(山本学校教育課長)

国のほうが望ましいとされているのが、10人から18人の学級なんです。

(大迫参与)

それはいろいろな、そういう教育学的な考えの中で出てはくるので、そういう意味での、理論的な意味での適正規模というのは絶対にあると思います。教育効果とか、いろいろなことで。だけど、そうするとそれを外れたらどうするんだというリアルな問題があるので、あまりそういう理論的なことにとらわれてしまうと、そうじゃないケースはいっぱい存在しているはずだから、必要なのはそういうことをどう教育として機能させるかというほうがすごく重要な課題であって、適正規模から外れたか外れていないかより、その議論が、できないものはできないんだから。じゃあ、できないところは教育できないかといったら、それは放棄したら無責任なことになるというのが僕の考えです。

(塩見教育長)

F大きく課題になってくるのは小学校教育なんです。ですから、今、町長も質問されたので、どれくらいの規模の学級であれば対話的な学習、いわゆる本当の意味で学んだ、何を学んだかという、いわゆるつくる人をどう作るかという、私はここが関係しておるんだろうと思っているんです。ですから、例えば、だいたい5、6人がグループの一つ。

(山添町長)

先生は4の倍数だと。

(大迫参与)

黄金数は24なんです。だから、僕が今作る学校だったら24人という形でやって、それは3でも4でも6でもできるので、テーマによってどんなグループでも作れる。24が黄金の数だという個人的な理論はあります。ただ、そうは言っても24人の子どもたちが集まらないわけだから、それなら、やっぱりその現実の中で我々の役目を果たすほうが重用だということを、さきほど申し上げました。

(塩見教育長)

理想的な数を求めながら、やっぱりこれから、将来を生きていく子どもたちに良い環境を提供してやろうという考え方で取り組んでおりますので、ご理解いただきたいと思いません。

(酒井委員)

今までは教育の内容のことについてご質問させていただくことが多くて、あまりこういうお話を聞かせていただく機会がなかったので、ちょっと質問させていただきたいんですけども、私たちが気にしているのは、小学校を統合することによって小学校も1校、中学校も1校という状態になります。結局、小学校から同じメンバーがそのまま中学校に上

がることになるんです。

一応、今のところは学級を2つに分けることになる予定なので、クラス替えなんかはできるんですけども、結局、それで人間関係が固定化するのではないかという心配がつきまとうんですけども、その点については先生はどのようにお考えですか。

(大迫参与)

非常に粗っぱい言い方をしますが、それは学級というよりも家族というような感じの、運命共同体みたいな形で考えたほうがいいと思うんです。何でも知っている、家族と同じようなレベルで考えていくという。要するに、学校と考えていくといろいろな、今の固定的な集団で、人間関係の幅も限定的になるし、そう思うと、確かに教育という視点で見ると頼りなく見える

逆に言うと、これは家族なんだと思ったら、宿命としてこの町でずっと一緒に生きていくんだという、そういう視点から見たら、実はかえって良いかもしれない。東京に出て困った時、やっぱり家族に助けを求めると同時にクラスメイトを頼れるというのは、とても良いことだと思います。だから、発想をそこに転換しないとマイナス面ばかりが見えてしまう。その中で発想できる、ポジティブな捉え方というのをできるだけ探っていくことが重要なんじゃないかなというふうに思います。

こちらの子どもさんの数も少しは伺っているので、知らなかったということではないんですけども、多分、ここだけではない現象だと思うので、その数から考えて、そこだよとなると、相当、可能性は苦しくなる。

(岡田委員長)

もちろん、そういう環境で統合を進めていくべきではあるんですが、統合できる環境があるならば、やっぱり統合させてあげるほうが教育委員会としては良いと思うが。

(大迫参与)

それはそれで、可能だったらやれば良いとは思いますが。

(岡田委員長)

それも含めて、教育委員会としては、そういう教育の予算の削減のこととかも話して、子どもたちにとってより良い環境とはどういうことかを、今、議論した通りに統合したほうがいいと思う。

(大迫参与)

それ自体は全然、進められたらいいし、だけど、統合した結果、人数が十分でなかったというケースがあれば、それは僕が申し上げたような理論構築をしないと苦しくなるだろう

うということを申し上げているので、もし、打てる手があるんだったら、それは打ってあげるほうがいいには決まっていると思います。

(森垣総括指導主事)

今から言うのは、組織的に事務局で話したことはありませんけれども、新学習指導要領の実施に向けまして、情報化社会の進展の中で、いわゆるプログラミング教育とかＩＣ教育が重要になっております。今、教育振興計画を作っておりますし、学校教育の重点にもこんなふうに記載されているんです。「ＩＣ教育、プログラミング教育を緊急に推進します」ということで、私たち指導部のほうでは、できたらどこかの学校を研究指定校にしながら、もちろん研修をしながらこれを進めていかなんというところが求められています。

現在、小学校、中学校にパソコンがありますので、基本的に現状ではパソコンを使いながら、それをできる先生の研修も含めて進めていこうとは思っているんですけども、お隣の市町の情報を聞きましたら、タブレット端末を、例えば各学級の生徒数配りましてですね、全部とは言いませんけれども、その研修も活かしながらＩＣ教育、プログラム教育の進展をしたいなという話をしておるんですけども、何せ、お金が要ります。

即、してほしいとは思いませんけれども、３０年度につきましては、さきほど言いましたように研究を進めるということはずでにしておりますけれども、次の新学習指導要領の実現に向けましては、ぜひとも他の学校を指定校にしながら、具体的に進めたいなという話をしております。これは来年するということではありません。実際にプログラミング教育をやってみたいという学校もありますので、ちょっと頭の隅に置いていただけたらありがたいなと思っております。

(塩見教育長)

来年度、社会教育と関連しながら、公民館でそういった教育をやっていきます。教員が研修に行ける機会を設けていきたいと思っております。

(山添町長)

今、与謝野町でも、農業とＩＯＴというのがすごく今、取り組みが進んでいまして、例えば、圃場にセンサーを付けて、そのセンサーに基づいて圃場の状態がどうなっているのか、そして水をもう少し供給しないと駄目ですよとか、そういうデータを基に農業を進めていこうという話がありまして、そこに参画しているのがソフトバンクであったりとか、結構、大手の技術系の会社なので、そういうところと教育を結びつけて、いわゆるプログラミング教育を通じて論理的思考とか、そういうことを学べたらいいなみたいな話を、今、進めているところなんです。

(森垣総括指導主事)

来年度につきましては、そういう教育研修を中心にやっていきたいと。本格実施の時には、そのような一体化について話していきたいと思っています。

(山添町長)

それでは、議題の(3)、その他についても議論をまとめたいと思います。それでは、平成29年度の第3回の総合教育会議ということで、さきほど来、皆様方にはたいへん熱心にご議論をいただきまして、本当にありがとうございました。

この間、皆様方と進めてきた総合教育会議の取り組み、そして大迫先生との議論を通じて、与謝野町の未来の教育、そして我々が取り組まなければならない一定の方向付けができた、本年度最後の会議になったのではないかと考えております

この点につきましては、我々の共通認識のもとに、今後、教育委員会、そして学校現場との十分な調整を図りながら、真に子どもたちの生きる力に結びつけていけるように、我々も一人一人、責任を持って努力をしていかなければならないというふうに思います。

本日の総合教育会議、皆様方にはたいへんお疲れ様でした。ありがとうございました。